

名前 () 日づけ (/) できた数 (/28)

使い方 書き下し文を声に出して読んでから、傍線の番号を手がかりに解きます。この詩の山は「猿嘯・蕭蕭・滾滾・苦だ」の読み、七言律詩の押韻と対句、そして前半＝秋の景色／後半＝老病孤独の自分という対比です。

あらすじ＝晩年の杜甫が、長江のほとりの高台にただ一人で登る。風は激しく空は高く、猿の声が悲しく響き、清らかな川岸を鳥が飛びめぐ。見わたすかぎり木の葉が散り落ち、尽きることのない長江の水がとうとうと流れて来る。後半で目は自分自身へ向く。故郷から万里も離れた地でいつも旅人であり続け、病がちの身でひとり高台に登る。苦労のために白くなった髪をつくづく恨み、そのうえ体をこわして、慰めであった濁り酒の杯までやめてしまった。雄大な秋景と衰えゆく自分とを重ね、人生のやりきれなさをうたう。

一次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

風（かぜ）急（きふ）に天（てん）高（たか）くして①猿嘯（ゑんせう）哀（かな）し

渚（なぎさ）清（きよ）く沙（すな）白（しろ）くして鳥（とり）飛（と）び廻（めぐ）る

無辺（むへん）の落木（らくぼく）④蕭蕭（せうせう）として下（くだ）り

不尽（ふじん）の長江（ちやうかう）滾滾（こんこん）として来（き）たる

万里（ばんり）⑦悲秋（ひしう）⑧常（つね）に客（かく）と作（な）り

百年（ひやくねん）⑨多病（たびやう）⑩独（ひと）り台（だい）に登（のぼ）る

艱難（かんなん）⑪苦（はなは）だ恨（うら）む⑬繁霜（はんさう）の鬢（びん）

潦倒（らうたう）⑭新（あら）たに停（とど）む濁酒（だくしゆ）の杯（はい）

語注 登高＝高い所に登ること。中国には陰暦九月九日の重陽（ちやうやう）の日に高い所に登る風習があり、詩の題はこれをふまえるとされる。猿嘯＝猿の鳴き声。長江の三峡の猿の声は、古くから旅人の悲しみをさそうものとして詩によまれる。渚＝水ぎわ。川岸。沙＝すな。廻る＝旋回する。飛びめぐ。無辺＝果てしなく広いこと。落木＝散り落ちる木の葉。蕭蕭＝木の葉がものさびしく散るさま。不尽＝尽きることがない。長江＝揚子江。中国第一の大河。滾滾＝水が勢いよく、絶え間なく流れ来るさま。万里＝非常に遠いこと。ここは故郷から遠く離れた土地をいう。悲秋＝ものの悲しい秋。客＝旅人。他郷に身を寄せる者。作る＝訓読では「なる」と読む。百年＝人の一生。生涯。多病＝病気がちであること。台＝高台。高い所。艱難＝苦しみ。困難。苦だ＝はなはだ。ひどく。つくづく。繁霜＝一面に降りた霜。鬢＝耳ぎわの髪。倒＝おちぶれ、やつれ衰えるさま。新たに＝つい最近。したばかり。停む＝やめる。断つ。濁酒＝にごり酒。粗末で安い酒。※律詩では二句ずつをひとまとまりとし、第一・二句を首聯（しゆれん）、第三・四句を頷聯（がんれん）、第五・六句を頸聯（けいれん）、第七・八句を尾聯（びれん）という。※本文は書き下し文で示している。韻（韻字）は書き下し文ではなく白文の句末で見ること。白文（原文）は次の八句。風急天高猿嘯哀／渚清沙白鳥飛廻／無辺落木蕭蕭下／不尽長江滾滾来／万里悲秋常作客／百年多病独登台／艱難苦恨繁霜鬢／潦倒新停濁酒杯。※「苦」は副詞「苦（はなは）だ」で、「苦しむ」の意味ではない。

A 語句の意味と読み（1～7）

(1) ①「猿嘯（ゑんせう）哀（かな）し」の「猿嘯」の読みを現代仮名遣いで書け。また、その意味も書け。

(2) ③「無辺（むへん）の落木（らくぼく）」の「無辺」と「落木」の意味を、それぞれ書け。

(3) ④「蕭蕭（せうせう）として」と、⑤の中の「滾滾（こんこん）として」の読みを、それぞれ現代仮名遣いで書け。また、二つの語が表しているようすの違いも書け。

(4) ⑦「悲秋（ひしう）」の読みを現代仮名遣いで書け。また、その意味も書け。

(5) ⑨「百年（ひやくねん）多病（たびやう）」の「百年」は、ここではどのような意味か書け。

(6) ⑪「艱難（かんなん）」の意味を書け。

(7) ⑭「潦倒（らうたう）」の読みを現代仮名遣いで書け。また、その意味も書け。

B 句法・漢詩の形式（8～13）

(8) ①をふくむ第一句から⑮をふくむ第八句までを見て、この詩の形式を漢字四字で書け。また、韻をふんでいる字を、語注に示した白文の句末からすべて抜き出せ。

(9) ②「渚（なぎさ）清（きよ）く沙（すな）白（しろ）くして」は、一句の中でも語がきれいに対応するように作られている。どの語とどの語が対応しているか書け。

(10) ⑤「不尽の長江滾滾として来たる」と対句になっている句を、書き下し文で一句すべて抜き出せ。

(11) ⑨・⑩をふくむ第六句「百年多病独り台に登る」と対句になっている句を、書き下し文で一句すべて抜き出せ。

(12) ⑫「苦（はなは）だ恨（うら）む」の「苦」の読みを書け。また、ここでの品詞と働きも書け。

(13) 律詩では、ふつう対句にするのは第三・四句（頷聯）と第五・六句（頸聯）である。①から⑮までの傍線がある八句を見比べて、この詩ではどの句どしが対句になっているか、決まりとの違いがわかるように書け。

C 主語・指す内容 (14～17)

(14) ⑧「常(つね)に客(かく)と作(なり)の「客」とは誰のことか。また「作」の読みもあわせて書け。

(15) ⑩「独(ひと)り台(だい)に登(のぼ)る」の「台」とは、どのような場所か。詩の題名ともあわせて書け。

(16) ⑬「繁霜(はんさう)の鬢(びん)」は、誰の鬢か。

(17) ⑮「新(あら)たに停(とど)む濁酒(だくしゆ)の杯(はい)」で、杯を停めたのは誰か。また「停む」とは、ここではどう書くことか書け。

D 口語訳 (18～21)

(18) ①をふくむ第一句「風急に天高くして猿嘯(えんせう)し」を口語訳せよ。

(19) ⑤「不尽の長江(じやうかう)滾(ごん)として来(き)たる」(第四句)を口語訳せよ。

(20) ⑥・⑦・⑧をふくむ第五句「万里悲秋(ばんりひしゅう)常に客(かく)と作(なり)」を口語訳せよ。

(21) ⑪・⑫・⑬をふくむ第七句「艱難(げなん)苦(く)だ恨(を)む繁霜(はんさう)の鬢(びん)」を口語訳せよ。

E 内容・記述 (22～25)

(22) ⑥「万里(ばんり)」と、⑨「百年(ひやくねん) 多病(たびやう)」の「百年」は対になっている。それぞれ何を表しているか、対比がわかるように書け。

(23) ⑬「繁霜(はんさう)の鬢(びん)」とは、どのような状態を表した言い方か。たとえばに注意して説明せよ。

(24) ⑮「新(あら)たに停(とど)む濁酒(だくしゆ)の杯(はい)」から、作者のどのような境遇が読み取れるか。三十五字以内で書け。

(25) ⑤(前半)と⑮(後半)をふまえて、この詩の前半四句と後半四句は、それぞれ主に何をよんでいるか。両者の関係をふまえて、この詩の主題を説明せよ。

F 文学史・作者 (26～28)

(26) この詩の作者杜甫は、どの王朝の詩人か。また、後世どのように呼ばれるか書け。

(27) 詩の題名「登高」の読みを書け。また「登高」とはどのようなことか、中国の風習にもふれて書け。

(28) 「国破れて山河在り 城春にして草木深し」で始まる、同じ杜甫の五言律詩の題名を書け。

【テスト直前チェック】この三つ ①韻字は「哀・廻・来・台・杯」。七言の詩は第一句末も韻をふむので「哀」を落とさない。押韻は書き下し文ではなく白文の句末で見ること。 ②「苦」は「はなはだ」。⑫「苦だ恨む」を「苦しむ」と訳すと即アウト。「ひどく・つくづく」と程度を強める副詞です。 ③記述は「対比」で書く。前半四句＝雄大な秋の景色、後半四句＝古い・病・流浪の自分。「万里(空間)と百年(時間)」まで書けると満点に近づきます。